奇跡の池田家文庫

今津　勝紀

一、岡山空襲と池田家文庫

本学附属図書館に収める池田家文庫は、初代岡山藩主池田光政が寛永９年（1632）に鳥取から岡山に入部して以来、明治４年（1871）の廃藩置県に至るまでの約 240 年の岡山藩の藩政史料及び池田侯爵家旧蔵の和書・漢籍などの図書類で、藩政史料 68,083 点、和書 4,166 部（22,117 点）、漢籍 653 部（10,420 冊）の総称である。江戸時代に大名と呼ばれる家はおおよそ 300 家ほどあるが、その統治の内実を示す文書類は、明治以降、分散・散逸さらには滅失したものも多く、江戸時代に備前国を統治していた岡山藩の藩政史料は、国持ち大名の統治の全体を知ることができる一括した史料群である点で貴重である。本学では池田家文庫の原史料を教育に活用するとともに、絵図類を広く市民に公開するなどしているが、こうした好条件に恵まれた大学は日本でも数えるほどである。池田家文庫が本学でこのように活用されるに至るまでには、いくつもの奇跡があった。

岡山県では、昭和 20 年６月 22 日に三菱重工業水島航空機製作所のある水島が空襲され、その一週間後の６月 29 日未明に岡山市が空襲をうける。マリアナ諸島のテニアン島の基地から飛来したアメリカ軍の B-29 爆撃機約 140 機は、紀伊水道から淡路島の南の沼島、小豆島の南端大角鼻、犬島の上空を通過して、旭川河口から岡山市街地へと侵入し空爆が行われた。夜間空襲では、まず大型の油脂焼夷弾（M47）が投下され、投下目標を設けた後に、内部にゼリー状に加工したガソリンと黄燐を混ぜた小型の集束焼夷弾（E48、集束弾から M74 焼夷弾 38 本が解束される）を投下して攻撃目標を焼き尽くすのだが、岡山空襲では現在の県庁通りと国道 53 号線の交差する郵便局前の電停辺を投下目標とし、そこをめがけて合計で約 980t、解束された焼夷弾をふくめると合計で約 95,700 発の爆弾が投下された（日笠俊男『B-29 墜落：甲浦村 1945 年６月 29 日』吉備人出版、2000 年）。

岡山市街地は一面火の海となり、逃げ場を失った多くの市民が犠牲となり 1,725 人余りが命を落とした。重傷者は 897 人、焼失家屋 25,096 戸、焼け出された人の数は 104,606 人に達したという（藤井学ほか『県史 33　岡山県の歴史』山川出版社、2000 年）。昭和 15 年の国勢調査による岡山市の人口は 163,552 人、世帯数は 36,496 世帯なので、この被害がいかに甚大なものであったかがうかがえよう。岡山市鹿田の岡山医科大学キャンパスも焼夷弾により被災し、多くの施設が焼失するなかで、教職員・医療スタッフ・学生が押し寄せる負傷者の救護に力を尽くしたことが『岡山大学医学部百年史』（岡山大学医学部創立百周年記念会、1972 年）に記されている。当時の診療各科のカルテの一部は現在も保存されており、とりわけ皮膚科教室の『昭和二十年度皮膚科泌尿器科患者録』は岡山市の岡山空襲展示室が開催する岡山空襲展で展示されているが、こうした診療記録も今や貴重な歴史遺産である。

岡山の市街地は、ほぼ旧城下町に相当するが、その７割強が文字通り焼け野原と化した。蓮昌寺の本堂・三重の塔など伽藍をはじめとして、中世から近世に掛けての多くの貴重な建造物・文化財が失われた。岡山城では、国宝に指定されていた天守閣をはじめ多くの櫓や蔵がな

どの建物が焼け落ちるが、月見櫓と西の丸西手櫓（いずれも現在、重要文化財）、二の丸跡地の池田侯爵家の蔵が焼け残った。岡山藩の藩政史料や大名調度は、明治以降、この内山下の池田侯爵家の蔵に収められており、偶然これらが残ったのである。

二、大学期成会と池田家文庫

昭和 20 年（1945）8 月 15 日の敗戦により、日本は連合国軍による占領統治下におかれた。戦後改革の一環として教育改革が進行するなかで、岡山総合大学の計画が持ち上がり、昭和 22 年（1947）10 月に岡山総合大学設立準備委員会、12 月に岡山総合大学設立期成会が発足する。岡山市に大学をという機運は古くからあり、昭和 2 年にも衆議院で議決され、当時の若槻礼次郎内閣に建議が付されるが、実現することはなかった。

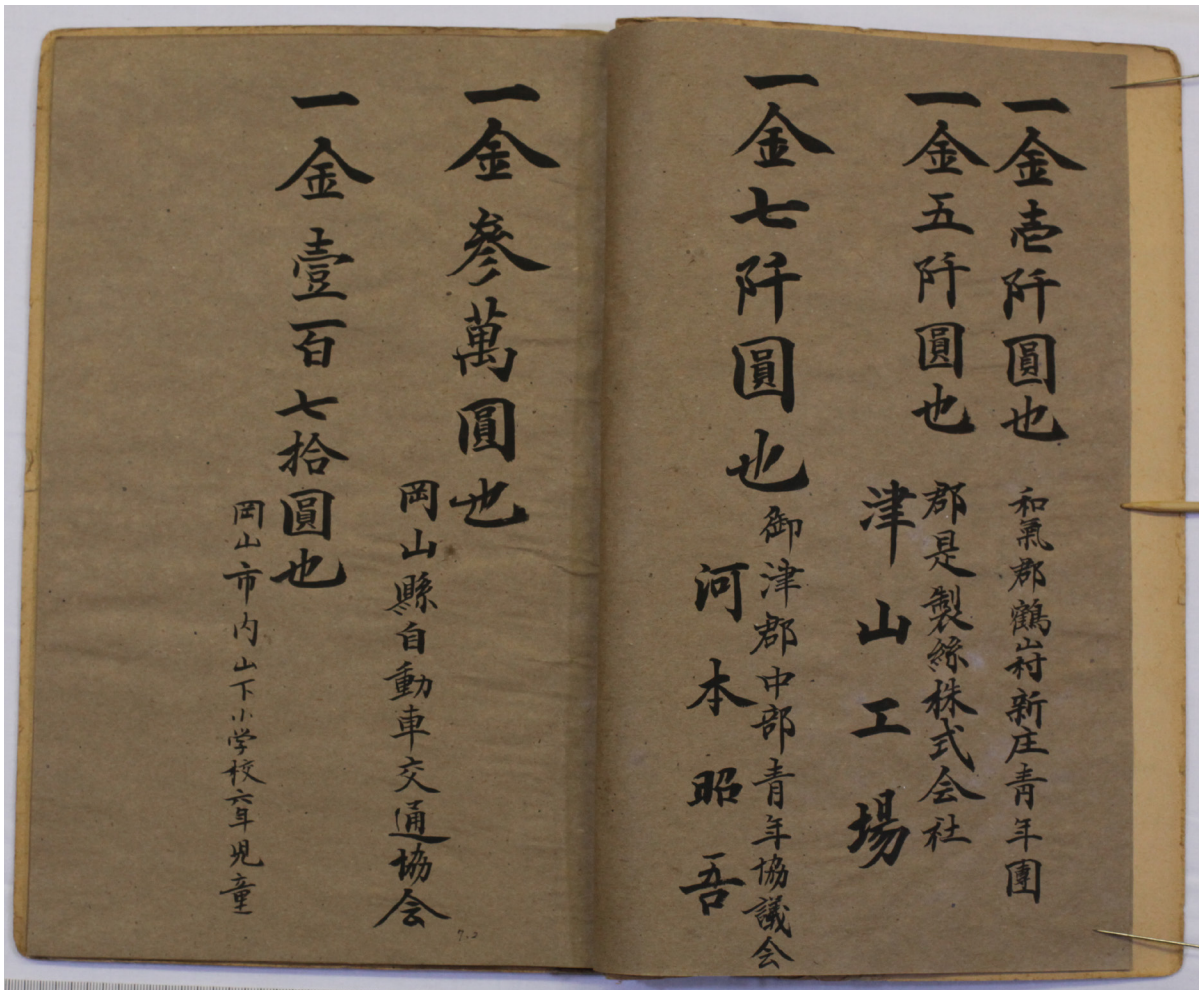
岡山に進駐した連合国軍は、津島の旧陸軍兵舎を接収し占領統治を行うが、昭和 22 年（1947）8 月には大半が撤収した。その跡地は 10 月に進駐軍から大蔵省に返還されるのだが、これを機に、旧制第六高等学校の一年及び二年生を津島に移し分校を設置して、新たな学舎としたのが黒正厳校長であった。戦後の混乱期のため、旧軍の物資を狙う窃盗団が出没したり、昭和 23 年（1948）1 月 16 日には、津島分校の兵舎を転用した生徒寮の階上より出火して、寮一棟・校舎四棟が全焼するなど、さまざまな困難があったが、第六高等学校の学生たちはこれを守り抜き、岡山大学の成立にともないこの広大な敷地と施設は津島キャンパスへと継承されることとなった。

岡山総合大学設立期成会は、昭和 23 年（1948）1 月には中国総合大学期成会へと改称され、本格的な誘致運動を展開する。大学設立をめぐる動向は『岡山大学二〇年史』に詳しいので、そちらに依られたいが、ここで特筆したいのは募金運動である。校舎改造費・附帯整備費・備品購入費・校舎拡張費・附属研究所設置費・創立事務費など合計三億円強の大学施設整備資金を確保するために、期成会は募金運動にも積極的に取り組んだ。昭和 23 年度の第一次資金募集の目標額は 52,566,000 円であったが、「岡山総合大学設立資金第一次募金運動」と題したパンフレットが広く岡山県民に配布され、県下の郡市単位に支部を設置し、町村毎に分科会を設けて、それぞれ責任額を割り当てて募金を行った。このほか、煙草のピース一箱を節約して募金に充当する運動を県民に呼びかけたり、小中学校および高等学校長に依頼して PTA の協力を仰いだりもした（『岡山大学 50 年小史』岡山大学創立 50 周年記念事業委員会、1999 年）。

現在、附属図書館にて保管している「中国総合大学誘致資金醵出芳名録」は、年月日の記載がないが、そうした中国総合大学期成会の募金運動において作成された資金拠出者の芳名録である。戦後の物資不足のためか、ザラ紙に墨書きして冊子に綴じ、厚紙を表紙にした簡易なものであるが、そこには 16 件の芳名と拠出金額が記載されている。もとより、これが募金のすべてではないが、そこには、林原株式会社が 50,000 円、岡山東西旅館組合が 26,400 円、岡山商工会議所が 12,000 円、中国銀行が 20,000 円を拠出したことが記されている。また芳名録には、そうした大企業や大きな組織だけでなく、現在の備前市鶴山にあたる鶴山村新庄青年団が 1,000 円、内山下小学校六年児童が 170 円を拠出したことがみえる。まさに県内の大企業から小学生までが拠出に応じているのだが、募金には戦災からの復興と教育を通じて、新しい日本を建設しようとする広範な市民の思いが込められていたのであり、岡山大学はそうした希望に支えられて成立したわけである。

戦後の混乱期ゆえ、せっかく焼失を免れた池田家の大名調度品や岡山藩文書の流出・散逸も危惧されるところであったが、岡山藩文書については岡山総合大学設立期成会副会長の谷口久吉氏や伊原木貞秀氏（池田家財政顧問、当時天満屋社長）の斡旋もあって、岡山大学の施設整備の一環として、期成会が募金を原資に池田家より買い取ることとなった。現在、岡山大学の貴重な学術資源として附属図書館池田家文庫に収められているが、藩政史料を一括して残すことができたのも奇跡にほかならない。そして、それが実現するにあたっての期成会の獅子奮迅の働きや、募金を寄せくれた小学生に至るまでの広範な人々の熱い期待を忘れてはならないだろう。附属図書館の使命として、これからも池田家文庫を適切に保存・管理するとともに、研究・教育に積極的に活用し、広く地域社会および人類の遺産として世界に公開・還元してゆきたいと思う。

「中国総合大学誘致資金醵出芳名録」（附属図書館蔵）



（いまづ・かつのり　附属図書館館長）